

現代思潮から見る音楽の価値

知念辰朗

Tatsuo CHINEN

The Value of Classical Music on the Contemporary Thought.

序

音楽に親しむ人々、特に自ら歌い楽器を奏する人々は目立たないが、各地に増えつつある。その人達の技術水準は千差万別であるが、いずれも自発性に富み、積極的の活動を行っている。一般的分類をすればアマチュア、セミプロ、プロフェッショナルの3段階にわけられよう。元来、プロの音楽家は、音楽を生業に亘って自己学習する典型であるが、ここでいうアマチュア、セミプロ、も学習内容の程度差はともあれ、プロフェッショナルな生き方を規範として、音楽を生業の糧とする。最近提唱されている「生涯教育」の観点からいえば、自発性に基づくこうした活動こそ、求められる理想の姿なのであろう。ライフスタイルは、どのようなものが良いかは結局一人一人に培われた価値観に基づくものであるが、その価値観も、ほぼ25～26才までに固定するものである。特に音楽の場合は、10代で半ば基本的方向がきまる、それまでに定まらない価値観であれば、それは生涯学習という視点から見れば上手く機能しにくい。しかしその場合でも、その人にとって数ある趣味の一つとして存在するならば、それで十分に意義がある。さきの息の長い自己学習、それに耐える価値の創造となれば、それなりの努力を経なければそうした価値観は獲得できない。最近、都市部に増えた若いアマチュア達は、小さい時から一環した音楽教育を受けており、それが現在の活動の基になっている。バイオリンなどは、その典型であり、一般大学にあるオーケストラでは、弦楽器パートの大半はこうした人達が中枢を担っている。そして彼等によってクラシック音楽文化が支えられている、また将来家庭を持つことで、家庭音楽の基盤が増え、音楽文化の定着と継続が維持され

る。戦後発展した器楽教育の大きな成果をここに見ることができる。一方、小、中、高等学校における学校音楽も同様で、特に吹奏楽や合唱などのクラブ活動が、生涯学習の基を作る。顕著なクラブ活動の実績を持つ学校からは、専門家への道に進む者もいる、そうでない者でも、アマチュアとしての活動を継続する、結果的に、音楽を生業の糧と意義づけた人生を送るのである。以上、これらの例は、生涯学習の視点からいえば、いわば理想的な人達といえよう。このように優等生的学習者でなく、単なる趣味の一つとして位置づけていようと、この差はあまり問題ではない、音楽教育にとってみれば、両者とも、一応の成果として評価できるのである。

〔I〕今日の問題

問題なのは、今、学校教育にみられるかなりの生徒が、始めから芸術教科にマイナスイメージを抱き、音楽の授業に断絶感を持っていることである。彼等は一見おとなしい様子であるが、内心は全く無関心であり、無感動なのである。中には逆に反抗的態度の生徒もいる。こうした状況は、今や、慢性的症状のままで定着し、ほぼ全国の学校に共通する悩みなのである。もちろん、そこに内包されているさまざまな原因・理由もさんざん語られ議論され、対策が研究されているが、いまだにこうした症状は続いている。端的にいつてしまえば、原因は、音楽芸術それ自体の無関心に尽きる。だが音楽教育にとって生徒達が全く関心を持たないということは、重大な問題といわざるをえない。前述した、理想的学習者にくらべ、同じ時代環境に育ちながら、この関心の差はあまりにも著しい。音楽の授業に当り、又そのスタートの時点におい

て存在するこの根本問題を、どのように解決するかが、我々の直面する最大の難問である、この問題の解決なくして、公教育における芸術教科存立の意義も疑われる。しかし、一方このように芸術文化に、全く関心を持たなくなった生徒達が増えたことについて、少し視点を変えた冷静な考察も必要である。実は、この問題の渦中において、日々対応に悩む教師達も、内心、この原因の寄って来たところをすでに感知している、すなわち、生徒達に最も影響力を持つ家庭と社会環境、中でも特にマスメディアにその大きな原因を見ることができる。周知の如く、現代の大衆社会、日本では、豊かな「モノ」文化に比べて精神文化への関心はあまりにも低い。又芸術の価値自体の混乱に伴ない、価値そのものが低落し、軽視されている、音楽といえば気晴らしか、娯楽の一部と見なした評価が、今、社会の大半を占めている。そうした社会思潮の中で育ってくる子供達が、芸術教科に関心を示さず、マイナスイメージを持つことも不思議ではない。芸術、その存在と価値は、結局その時代に生きる人々が評価するのである。よって、現場で懸命に努力する教師達、すなわち、新しい価値理念（興味や楽しさ）の模索、教材の研究、開発、といった授業の方法論的発想だけでは、もはやこの難問は解消できない。学校そのものを飲み込んだ社会全体に内在する大きくて、深い原因が係わっている。もとより教師は、万能ではないのであって、問題の性質によっては、学校というカテゴリーの中だけではどうしようもない解決不可能な問題もある。（これは、芸術的価値の問題にかぎらない）現に、同じ学校という組織の中で、すでにできている教科間の格差、例えば、音楽を含む実技教科と他の教科（主要教科）との間にある著しい時間的格差を見てもわかるように、ここには、現代社会の人々の教育に対する価値の総和（ある種の偏見と芸術教科全般に対する人々の無言の評価）が、皮肉にも素直に投影されているのである。よって、この小論では、芸術文化の価値について、広く社会の思潮動向を考察し、音楽教育を論ずる。

〔II〕 現代社会に見る個性

個性の尊重・重視が盛んにいわれるこの頃であるが、それが何ともニヒリティックに聞こえる。すでに多くの社会学者が指摘し、われわれも実感しているが、現在の大衆社会はきわめてパラドックスな構図を見せる。例えば政治参加への熱心さに対し、それとは逆に政治への無関心派の増大、個人の権利と自由の拡大とは裏腹に個性の消失、すなわち画一化が進む、都会に見られる大団

地という集合住宅が象徴するように、人々は住居空間の体系化、画一化を余儀なくされる。大衆社会ではまず「物質」の画一化が驚くほどの勢いで先行した。そしてそれに伴い、人間の精神までも規格化、画一化が進む。こうした現代社会にどっぷりと浸っている人々、特にこうした状況下で育った若い人達が、はたして真の意味での個性化（求められている）に対し、明瞭なイメージを持っているのであろうか。そして仮に抱いていても、それを切実に発揮するほどの価値観と思っているのであろうか、更には、現代社会が本当にそうした個々のエネルギーを発散させるほど自由で寛容な機構体制なのであろうか、など素朴な疑問を覚える。今、われわれの実感、何か見えざる巨大な意図（力）によって、組織され、管理され、操作されている。そしてこの実感の裏には、個人々の全く自由な発想や思考、行動など許されないという暗黙の意図を感知する。だから人々は、この見えざる巨大機構組織の中に、うまく管理され、あふれる物質に恵まれ、便利な生活を満喫しているように見える。しかし豊かな「モノ」文化に対し、精神文化の対応は大きく変容してきた、特に、従来人々が抱いていた芸術への思考が、時代の流れと共に変わってきたのである。すなわち、従来は、芸術の価値、その獲得のために一人一人が真剣な継続的努力を前提とすることが、一般的に諒承されていたのである。しかし現代の多くの人達は、そうした獲得のための努力を忌みきらう、ひた向きな努力は〔ネクラ〕というイメージで一掃されてしまう、しかし価値自体は追い求めるのである。よって、芸術的価値と称する「モノ」が代理として生れ、人々はそれを手軽に買う。これが現代の風潮なのである、さて「モノ」に「化体」^{注1}された文化・芸術と称する「商品」は、もちろん巨大な力（企業・情報）によって創られ管理される。従って、その価値をコントロールするのもこの巨大な力による、そして、これら化体された商品は、「位」^{グレード}という尺度に置き換えられ、人々により高い位へと宣伝誘導する、人々はいとも簡単にその宣伝にのせられる。なぜならば、その芸術・文化商品の価値判断を、自己によらず他者に委ねているからである、このように、元来主体的に定める価値感の放棄は、価値、そのものを市場のカテゴリーに入れた、その結果、物質的価値と、精神的価値が、この時点で妙にうまく合体し、人々は、あたかも自己の選択で定めた価値として、化体された商品を手軽に買うことで自足する。これが今はやりの「文化の市場化」^{注2}というものであり、全国に猛烈な勢いで拡大しつつある。ここに、本来、自己確立を旨とする個の価値感が、巨大な力により、知らず知らずのうちに蹂躪される、よって従来の個性の意

味も当然変容してくるのである。しかし、考えてみれば、そうした巨大な支配力を持った思潮、すなわち、人々の価値感までも規定する強い「箍」^{たが}を、いったい誰れが操っているのかという素朴な疑問が湧く。山崎正和氏によれば、それを「顔のない(世間)の支配」^{せう}と指摘し次のように述べている。「現代の消費社会に於ては(世間)というつかみどころのない、すなわち顔のない他人から生まれる流行という無署名な没人格的な呼びかけに大衆はおとなしく従属してきた、…現代人が他人志向的になりはじめたのは、彼等の内面を形成する家庭という小集団が力を失い、親という顔の見える他人が弱体化した。…学校もまた、フィルターの機能を弱め、逆に人気者の生徒がスターのしぐさを模倣し、それをまた教師が模倣する。この場合スターというのはもちろん巨大社会の画一的流行の象徴であるが、それがどんな小集団の壁も破って無遠慮に直接的に、個人の行動の方向に影響をあたえてきた。……人は情報を一方的にあてえうるばかりでそれに対し有効に応答したり、自分から積極的に情報を発信したりすることは許されない、……巨大社会の流行に操作され、行動としての自発性を禁じられた行動である、……人間が内部に行動の動機を持たないとき、彼等がそれを外部に求め、いやが上にも模倣的な行動を繰返す、そのことがますます巨大社会の「流行」を増幅することにつながっていくのは自明である。」^{註4}少し長い引用であるが、大衆社会に生きる人々の没個性化が明瞭に語られている。一見自由で快適に生活しているが、人々は有無をいわせぬ大きな「箍」^{たが}の存在を常に感知している、結果的に没个性的生き方を強いるメカニズムの時代にあつて、真の「個性化」の至難さを痛感する。又文化・芸術に関する思潮もこうした過渡的時代の中で、従来とは違った思想が現れてくるのも当然と考える、今、人々は「個」として主観的に判断する「質」的価値を、客観的な「量」に置きかえて定量的価値づけをする。又主体的判断・評価よりも他者(世間)による評価に敏感になり、そこに権威を委ねはじめるようになった。

〔Ⅲ〕 聴衆の変容

現代に生きる人の多くが、時代の思潮の影響を受け、没个性的になり、そのことが同時に精神文化をに接する思考にも及び、従来にくらべ著しく変容したことを述べた。音楽芸術に関する現象としては、聴衆のあり方が大きく変容した。これまでのクラシック音楽の聴衆のあり方、その基本は、まずコンサートホールという特定の場所に出かけ、生の演奏を聴取する。その態度は真剣で真

面目な集中的聴取である。そして作品全体の構造、すなわち「主題」、「展開」、「再現」という起承転結による音の構築を聴き、作品の「意味」、「概念」をつかみ、演奏者の解釈を合わせ聴取する。こうした姿勢が従来の在り方であった、そして、そこでは積極的聴衆と演奏者との「心」の交流、このコミュニケーションにより、演奏者もまた新たな反応をする、これが一回性を使命とする演奏者と聴衆との関係であり、この関連でその日の演奏会が成就するのである。そしてこの両者の統合をもって音楽文化水準をを評価したのである。一方現代の聴衆はこういった従来の聴衆とは全く違う聴き方をする。特に大きな違いは、作品全体を統合的に聴く構造的集中聴取に堪えられない、それ以前の問題として、黙って30分以上聴くことすら我慢できない、シンフォニーを全楽章通して聴くことが一般的に至難になっている。こうしたことの原因は子供の時から音の情報過多の中で育ち、音に対する感覚が全体に鈍感になっている。又真面目に集中聴取するという思考自体空洞化した(前述した「ネクラ」という風潮)。そして何となく漫然と音を聴きながら何か他のことをすることが一般化した、当然生演奏による「一回性」の持つ緊張も崩壊する。又レーザーディスクやビデオなど映像を含む再生録画(音)の機器による複製により、いつでも何処でも何回も手軽に見・聞かれるという便利さが結局一回性を旨とする集中的聴取態度を崩壊させたといえよう、茶の間で寛ぎコーヒーを飲みながら気楽に聴くことが普通となれば、わざわざコンサートホールへ出かけなくともよい。だから出かけるにはまた別のわけがある、(モダンな建物と雰囲気)そしてここでは従来の聴取態度はもはやとらない、そしてそれを受ける演奏者とは「心」の交流を欠く、更に拍車をかけたのが商業主義の台頭である。一昔前には企業の宣伝広告にクラシック音楽の使用は一般になじまざ結びつかなかった、ところが最近の風潮はすっかり変わってきた、企業が積極的に芸術文化面に参画する。企業のねらいはもちろん自社商品の宣伝であるがその手段としてクラシック音楽の持つ「イメージ」を最大に利用する。それはかつて「芸術音楽」がもっていると思われた尊厳さや優越性、それをエリート達が好き、高級音楽と位置づけた懐古的虚像イメージを今頃もちだしてきて宣伝広告に駆使する。クラシック音楽を聴く体験自体、それを「本物」と仮構し、そのことと同一性をその商品にイメージさせる。従ってここでの演奏の質は問わない、もとより人々も要求しないし評価もしない。体化された商品や雰囲気「本物の生活」を彩るために、有用と人々がイメージすれば、目的は十分に達したのである。その道具立てとして有名な

音楽家や一流にランクされるオーケストラが必要なのである。もっとも近頃では有名や一流というレッテルは、宣伝広告側の意図に寄って作られる、ともかくクラシック音楽は恰好の宣伝道具になった、そして「冠コンサート」として企業主催の演奏会が各地にふえている。もちろんこうしたコンサートで従来の聴衆も多大な恩恵にあずかるが、最近ふえてきた新しい聴衆のお目当ては、ゴージャスで明るく気軽な雰囲気をかもしだす、さまざまな設備を持ったホールの建物、それ自体が魅力なのである、更にそれが今話題の建物があれば催しに関係なく足繁し通う、演奏の曲目も内容の質も演奏者もあまり気にしない。その絢爛豪華なホールで眼前に展開する音の響宴に陶然となりながら、音の断片をあれこれと想像することが、グレードの高い優雅な生活観なのであり、モダンなのである。作られたイメージ商品は、クラシック音楽の中にますます増えている、その乱用悪のり典型として最近発売されているCDに面白いタイトルがついている、いわく「ロック風クラシック」「艶歌調クラシック」「気分が落ち着く名曲」「勇気のでる名曲」などまさにイメージの乱用であり、イメージの画一化とその押しつけにほかならない。しかし今やイメージによるこうした「文化の市場化」が人々を席卷しつつある。しかしこれはあくまでも時代の過渡期的現象としてとらえたい。

〔Ⅳ〕 価値の相対化

現代社会ではさまざまな価値や認識に絶対的根拠がないとされ、全ての価値を相対化してゆくことが普遍化した。哲学者森本哲郎氏もその著書で「デカルト以来の普遍的理性の夢は破れ、多元的理性への認識地平が切り開かれた」と述べ、更に「ヨーロッパ人が確信していた（普遍妥当的真理）なるものは、じつは、ヨーロッパ人の理性にしかすぎず、この地球上にはそのヨーロッパ的知性と全く異質なものの考え方、理解の仕方がいくらかでも存在し得る」²⁸⁵と広大な多元的人間の精神を語っている。このように世界に共有される普遍的真理の存在が否定されると同時に、こん度は、日本人としての独自理念の確立が問われはじめ、精神的価値の模索の時代に入った。そして今も世の哲学者、歴史家がこぞって新しい「イデー」、を追求しているがまだ解けない問題である。だから現在は、絶対の価値基準がないということだけが皮肉にも、人々に普遍化している。又云い方をかえれば新しい価値が見つからない混乱状況とも云える。しかしだからといって「もうこれ以上の価値や認識のアナキズムの主張をやめ、何が価値だかわからないが、人間にとって絶対的

価値をどこかに仮構し、それをどうやって求めるか議論した方がよい。」²⁸⁶と論じる佐伯哲思氏の考えに同意したい。なぜならば、絶対的普遍価値の不在ということで、これまでにさまざまな価値の権威を解体することが先行し一般化したけれども、それに代わる何ら新しい価値秩序が生まれていない以上、存在するのは、限りない価値の相対化のみである。そして相対化の極地、飽和状態に近づいているのが、今日の社会状況ではないだろうか。人々は、あらゆる価値を相対化することに、すっかり慣れて巧くなってしまったが、逆に価値を峻別し、秩序を立てることは極力避け、他人に委ねる習慣がすっかり身につけてしまった。主体的価値決定をタブー視し、勇気を失った我々は、いたずらに限りない相対化にくれる。何一つ責任を持たないことは気楽ではあるが、その結果価値の並列作業にのみ従事することになるそのことによって、人・物に対する「直感」や素朴に感ずる「愛」・「信」や「願い」を持つということが次第に失われてゆく、このように自己から発する「直感」・「愛」・「信」などいっさい無視した過度の相対化、それは明らかに虚無的思考へと連なってゆく。我々は、そうした虚無的作業をそろそろ打ち切って自己の「心」から発する素朴な「知恵」を取りもどす時期に来ているのではないだろうか。相対化の渦中にある今日、文化的価値は自己評価を極力蒸溜し、「モノ」文化に化体し羅列されている。代わって市場の基準による評価が台頭しはじめた。

〔Ⅴ〕 授業への対応

この小論はクラシック音楽に限定し、現代の人々のクラシック音楽への「価値観」に関連する問題を論じた。周知のように社会に散在する音楽ジャンルの中で、クラシックは少数派に属しているが、音楽教育という観点から見ればクラシックが中枢を占めているしこれからもこの体制自体は継続するものとする。しかし、その在り方については、時代のすう勢に左右されることはまちがいないが、そうした流動する思潮を勘案しながら、音楽教育に関する諸問題を実現可能な範囲で検討すべき時期にある。それにしても、今、散在する音楽文化は多様化の中で渦巻いている、その影響をまともに受けている児童、生徒への教育対応は、当然多様化の方向に進まざるをえないであろう。しかし、ここで銘記すべきことは、いたずらに多様化現象に振り回されないことである。うっかり惑わされて相対化の渦中に巻き込まれることは、返って虚無的思考になり、孤立化を招く。逆に今こそ慎重に対処すべき時である。我々は激しく変化する時代の

思潮に対し、頑な態度でそれらの思潮を拒否するのではなく、柔軟に受けとめるのは当然であるが、ただ「価値」の決定は、決して慌てず慎重を期すべきと考える、なぜならば、るる、論述した如く、芸術文化の価値の秩序が乱れている混乱現象なのであって、既存の価値が消失したのではない、更に新しい価値秩序が確立されたのではない。いわば過渡的状況にある。クラシック音楽の価値に限って云えば、音楽自体、独自に秘めている「生命」これは決して他とは和解融合しえない。そしてそれが「美」そのものとして、人々が価値づけてきたが、現代の強烈な市場主義の猛威にあい、価値がもろくも風化し、市場と慣れ合い。「モノ」文化と融合折衷したのである、これが文化芸術の市場化として人々の喝采を受けているのである。しかし見方をかえて、これも相対化から見れば、伝統的価値から分離した1つの変型的価値ともいえる。そして、この変型価値は、時の流れにのって、かぎりなく違う「差異」化をし、又別の価値に豹変する。いわばこうした流行現象に多くの人が影響を受けるシステムの社会であるが、一方既存の価値を踏襲する人々もかなりいる。しかし、結局そうした混沌の状況下では、芸術教育としての盤石な価値の普遍性が求めにくくなっていることは事実である。このことが教師達の教育への「迷い」と「悩み」の根本になっている。たしかに主要教科重視の煽りを受け、疎外的条件（わずかな時間）の下で行われる音楽の授業自体大きな問題であるが、それよりも、こうした価値の混沌からくる価値の「不安定さ」、また相対化が多くの子供達に芸術教科存在の大きな不審の背景になっており、それが音楽の授業に対し、マイナスイメージの要因になっている。今、もろもろの悪条条件下にある芸術教科であるが、この根本的要因が最重要な課題である。そしてこれまで論じてきた如く、この課題は学校の授業の中だけで解決できない、そして芸術の価値の普遍性については残念ながらもまだに確立されず、近い将来にも光明を見出せそうもない。こうした中で新しい理念によるパラダイムの枠組作りには、より慎重を期さざるをえないが、明言できることは、クラシック音楽に係る全ての人々、（作曲家、演奏家、評論家、学者、教育者）が現代の思潮動向をどのように捕え判断するかを議論する時であるが、そういった広い立場からの議論がまだ行われていない、それぞれの立場での散発的発言にとどまっている。このことは、今の社会現象を単なる過渡的なものと楽観的に見ている人や、授業での荒唐に直面し深刻に受けとめている教育者など見解の差が大きい、従って、まず議論の統合を計る時である。そして教育の現状に関しては、今ほど教師としての高い総合能

力が必要な時期はない、そして芸術教育に対する個々の「信念」が改めて問われている時期ともいえる。芸術教育にとって最悪の環境条件にあるが、逆にそれをばねにして逞ましく脱皮する機会とも考えられる。大きな視野に立った柔軟な思考、そして自己判断による試行、この自らの活動により価値を生成し続け混沌と対峙する意欲が望まれる、しかし今は芸術教科にとって受難の時である。

〔VI〕 結び

最近、人々の動向に少象化・分象化^{注7}の現象が見られる。これだけ高度に発達し成熟した国では、多数をひとまとめに扱う画一化に不満を覚え、多様な価値観を尊ぶ人々（集団）が生まれてくるのはきわめて自然な現象であろう。こうした動向が顕著になった今、「巨大な力」側も注目せざるをえない。最近まで情報企業の最先端電通で名プランナーとして活躍した藤岡和賀氏はその著者で語っている。「どのように企業風土を変えられたらよいのか、そこで（プレイ）という概念や思想が必要になる……これは（ワーク）の先にある概念である。ゴルフに限らずスキーでもテニスでも、そして仕事でも（ワーク）で一生終っては一向に楽しみを手に入れられない（プレーヤー）まで突き抜けることで楽しみを手に入れることができる、そのためには若いうちの何年間は努力する期間、忍耐する時間をもたなければならない…」^{注8}、又昭和戦後文化に「香」りがないと指適、例えば、使えば使う程の愛着商品を生み出さなかったこと、それは供給側と消費側両者に年月の時間の概念が全く育たなかったからである。

もう一つの理由として我々は遊びや無駄に対する根強い後ろめたさがある、それがひたすら経済価値や効率を重視しすぎた、だから「冠活動」でも企業のPRに引き合う投資効果ばかり考え、単に面白いとか、楽しいとか、有意義というだけではなかなかサポートしない、それどころか中にはそれで儲けようとしたり、少なくとも投資の元をとろうという考え方が強い、と痛烈な批判をし、文化に“香”のない理由としている。^{注9}そして人々が「物の豊かな社会にいながら、（豊さ）の実感が乏しい」とする不満に答え、「ある一定のレベルの経済基盤と高い選択性だけでは人は豊さを実感できないのであって、「ゆとり」という別の価値尺度を立てなければならない、…そして「ゆとり」が人々の生活時間に、あるいはライフスタイルに帰ってくるのが最も大事なことであり、そのことで富とか貧しさという次元とは違う別の次元で豊さが生れ、これがグレードアップの本当の意味である

と」定義している。注10この小論の冒頭で述べた理想的自己学習達の例は、すでにこの提言を先き取りした生き方をしている。我々教育に係る者は、この「ゆとりの時間」という言葉をいったい何年語り続けて来たのであろう、今や手垢によごれた形骸化つつある。なぜならば、生徒も教師も実生活ではますます「ゆとり」から遠ざかった生き方を強いられているからである。かつては「巨大な力」の有力な構成員の一人であった藤岡氏から21世紀を目指す生き方の提言としてこの「ゆとりの時間」という言葉を聞く時、何と平凡な言葉だろう（我々にとって）と実感した。人々の関心、それは言葉自体の持つ意味ではない、むしろ言葉が語られる発信人や発信所に大きな関心と価値を見るのであろう。しかし分衆・少象の動きはあまりにも御仕着せがましい社会に反発し、自主的生き方を志向する人々の現れと考える、そこは当然限定された場であるがこの中でこそ真の自由が発揮できる、即ち自己から発信する素朴な感動を取りもどす。その具体化には改めて趣味の効用を真剣に見直す必要がある。そしてより良き趣味の確立こそ「生きがい」に通ずる、それには若い時忍耐や努力の時期が必要なのである。こういった発想や思考が人々の「知恵」として広く回復する時、芸術科の再生が成る。

注1 「化体」

「新しい消費現象」の意味は、モノが象徴的表現的形式でありうるということだけでなく、文化の中心的象徴的表現形式であったものが、売買されるモノ、すなわち「商品」と合体して意味＝価値を産み出す、堺屋太一氏は、それを、知識や芸術表現がモノに「化体する」といった。「産業文明とポスト・モダン」、佐伯哲思著、筑摩書房発行。（P144より引用）

注2 「文化の市場化」

文化の市場化ということは最終的にはあり得ないとしても、しかし「薄められた文化」の市場化は現に着実に進行している。同著P147文化と市場の結合より引用

注3 山崎正和著 中央公論社発行、「柔らかな個人主義の誕生」（消費社会の美学）P123～125「顔のない（世間）の支配」より抜粋

注4 （同上）

注5 森本哲郎著、佼成出版社発行、「学問の旅」P235～236より抜粋

注6 佐伯哲思著、筑摩書房発行「産業文明とポスト・モダン」より

注7 「分衆」

「均質的な大衆社会は、次第に崩壊し、個性的、多様な価値観を尊ぶ個別的な集団が生まれた」。博報堂生活総合研究所編「『分衆』の誕生—ニューピープルをつかむ市場戦略とは」P43

注8 藤岡和賀夫著、PHP研究所発行、「ニューバリュウの時代」（そのあけぼの）P167～168より抜粋

注9 「同著」より P171～172より抜粋

注10 「同著」より P173 より抜粋

参考文献

「柔らかな個人主義の誕生」（消費社会の美学）

著者 山崎正和 発行 中央公論社

「産業文明とポスト・モダン」

著者 佐伯哲思 発行 筑摩書房

「ニューバリュウの時代」（そのあけぼの）

著者 藤岡和賀夫 発行PHP研究所

「聴・衆・の・誕・生」(ポスト・モダン時代の音楽化)

著者 渡辺裕 発行 春秋社

「学問への旅」

著者 森本哲郎 発行 佼成出版社

「アンセルメとの対話」発行 みすず書房

著者 クロード・ピゲ：遠山一行・寺田由美子訳

「ポスト・フォルム音楽の時代」

論文 中村攝 発表 中央公論 1990年4月